

in the Ryukyu Archipelago and Taiwan. Also I thank to Dr. N. Takaki, Mr. Ch. Miyagi and other people who offered me many specimens collected by them in the Ryukyus.

* * * *

41) 日本新産の属であるツノクサリゴケ属(新称)の1種が琉球の西表島で見出された。リュウキウツノクサリゴケ(新称)と名づける。葉下片小さく、腹葉は大きい。近縁種の *C. emarginatula* および *C. exocellata* とは、腹葉先端が $2/5$ ほど鋭く切れこむこと、また、葉上片基部に 1-3-(4) 個の巨大油細胞があることで区別できる。

42) 琉球産クロウロコゴケ属 5 種の産地と検索表を記した。このうち *L. minutilobula* リュウキウクロウロコゴケは雌花序が未知でその正体がよく判らなかつたが、良好な花被をつけた標本を得たので図説した。葉下片は小さいが強くふくれる。本属中琉球低地に分布する最も普通の種である。これによく似た 1 新種 *L. takakii* タカキクロウロコゴケ(新称)を図説した。雌花序をつけない標本では前種と区別し難いが、雌包葉下片および花被は明らかに異なる。また小笠原原産の *L. brunnea* クロチャウロコゴケが琉球にも記録されていたが、これは別報(藓苔地衣雑報)で明らかにしたように *L. nigricans* クロウロコゴケの異名となった。なお、琉球で *L. applanata* にあてられていたものもすべて本種である。図示したのはクロチャウロコゴケの型で、茎葉はとがらないが、枝葉がとがる。

○モモとカキ その民族植物学的知見(藤田安二) Yasuji FUJITA: Momo and Kaki, an ethnobotanical treatise of the Japanese names of peach and persimmon.

1) モモ *Prunus persica* (Linn.) Batsch は中国西北部黄河上流地方の原産であつて、このあたりの野生桃を土地の人は現在野桃または毛桃と呼ぶ。また中国ではいたるところで原始的な桃が栽培されているが、すべて毛桃と呼ばれ、離核の桃である¹⁾。

中国ではモモは 2500 年以前から利用され、詩経、礼記、山海経などにはすべて桃 *táo* とあるが、爾雅だけはモモに旄 *mao* を与えている。爾雅釈木篇には旄冬桃なりとあり、郭璞の注には子冬熟するものとある。

このことは極めて注目すべきことで、黄河上流すなわち周の故地の原産と考えられる桃が周代以前には *mao* と呼ばれていたことがわかり、これこそモモの最古の呼称と考えられる。我国のモモもその伝来は極めて古く、弥生時代以前であり、あるいは我国にもモモの野生があつたとも考えられたが、これはおそらく我国へのモモの伝播が民族移動にともなつて甚だ古く行われ、後の中国伝来の栽培桃とは別系統のもの

であるための憶測であろう。

筆者はこの周代以前の旄 *mao*こそ我国の呼称 *momo* の根源であり、*mao* が二重化して *mao mao* すなわち *momo* となったものと考え。本草和名、和名抄などにモモを毛毛と書くこともこのことを一層確実にするものであり、我国の *momo* は旄系の呼称の周辺の残存型と見ることができる。牧野氏²⁾ はモモはマミ (真実) またはモエミ (燃実) の意ならんといひ、またモモ (百) の意ならんとするも共に首肯し難い、けだしこれは円形のもの古称ならんといわれ、前川氏³⁾ にもまた一風変わったモモの語原説があるが、筆者にはいづれも首肯しえない。

2) つぎに我国のカキ *Diospyros kaki* Thunb. の語原もまた極めて興味ある問題である。向坂氏⁴⁾ によればカキは印度における呼称と共通のものであるというが、たしかに印度では同属の *D. melanoxylon* Roxb. (= *D. tomentosa* Roxb.) を Sanskrit で *kakinduka*, *kakenduka*, *kakundoo*, *kakindoo*, *kakatinduka*, *kakatindu*, *kakavha* などといひ、Uriya 語では *kendu* となり、Bengali では *kend*, Hindi では *kendu* となる⁵⁾。この Sanskrit の *kakinduka*, *kakindoo* はたしかに我国の *kaki* と同系といえよう。しかしこの *D. melanoxylon* などは食用のカキとは異なり、コクタン (黒檀) の一種である。このことからすれば我国のカキは印度系の古代名が民族移動とともに南方から極めて古く我国に伝わり、後中国から渡来した食用柿にあてられるにいたったものと解釈せざるをえない。Sauer⁶⁾ は食用のカキは印度または印度支那の原産だと考えている。

(大阪工業技術試験所精油研究室)

文 献

- 1) 菊池秋雄, 北支果樹園芸, p. 91 (1944); 柴田桂太編, 資源植物事典, p. 791 (1949)
- 2) 牧野富太郎, 日本植物図鑑, p. 435 (1948)
- 3) 前川文夫, 自然と文化, 3, 117 (1953).
- 4) 向坂道治, 植物渡来考, p. 55 (1953).
- 5) Roxburgh, W., *Flora Indica*, p. 413 (1874); Laufer, B., *Sino-Iranica*, 588 (1919); Kirtikar, K. R. & Basu, B. D., *Ind Medic. Pl.* p. 758 (1918); p. 1505 (1935).
- 6) Sauer, C. O. (竹内常行, 斎藤晃吉訳), 農業の起源, p. 50 (1960).

Summary

Momo, the Japanese name of peach can be considered to be derived from the most ancient Chinese name *mao*. And *kaki*, the Japanese name of persimmon may be also assumed to be derived from the ancient Indian name. These facts are very interesting from ethnobotanical view-point.